

---

# まだ蒼い芽の中に君はいた

広瀬 柊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まだ蒼い芽の中に君はいた

### 【Nコード】

N5480D

### 【作者名】

広瀬 柊

### 【あらすじ】

日曜日の朝、主人公の大吾はまだ眠りの中にいた。そんな中、一緒に暮らしている恋人・真咲に急に起こされてしまう。その言葉は大吾にとって、意外なものだった。

## 第一話

「私たち別れて暮らしましょう。」

僕はその言葉があまりに唐突だったので意味がわからず、「何だつて?」と聞き返した。

だってどう考えても日曜日の朝、それも起きてすぐに言われるセリフではない。僕が起きるずっと前から起きていたのか、その声はともはつきりとしていた。

一体いつから彼女は起きてすぐに「おはよう」と言ってくれなくなったのだろうと、僕は寝ぼけながらに思った。僕は彼女の「おはよう」が好きだった。起きてすぐには声が出にくいのだろう。近くに寄ってきて、まだ寝ぼけている僕に向かって囁くように言うんだ、いつも。

「私たち別れて暮らしましょう。」

もう一度彼女が僕に向かって言った。

僕は両手を上げ一度大きく背伸びをした。目を開けると、彼女の顔が見えた。彼女は僕の横で、膝を付いて座っていた。

「おはよ。」

と、とりあえず言っただけでベッドから降り、寝癖のついた頭をかきながら、僕はまっすぐキッチンに向かった。まだ昨日の夜に飲んだワインが残っている感じがして、頭がぼーっとする。彼女は後ろからついてきて、キッチンカウンターの椅子に腰をかける。

「コーヒーは?」と聞くと「飲む」と返事が返ってきた。二人分の水をやかんに入れて火にかけ、彼女に向き合った。

「それで、何だつて？」

二回目ので彼女が何を言ったのかわかっていたのだが、僕はもう一度聞き返した。彼女が考え直して、「何でもない」と言うのではないかとちょっと期待していた。正直、こんな朝っぱらから話したくない話題だし、考えるのも少し面倒だった。

「だから、私たち別れて暮らしましょうって言うてるのよ。」

さすがに三回目になると彼女も少しイラッとしたのだろう。言い方が少しきつくなっていた。やっぱり期待通りには行かなかったの  
で、コーヒーマーカーにフィルターと粉をセットしながら、ようやく僕は彼女が何でそんなことを言うのかを頭の中で思い巡らせた。

最近かまってやれなかったからむくれてるのか。

いや、どちらかと言うと、ここ一ヶ月以上彼女の方が忙しかった。僕が彼女の分も夕食を作っておいたって、彼女は帰ってこなくて、次の朝の朝食になるなんてことはしょっちゅうだった。

何か悪いことしたかな。…特に思い当たる節はない。

他に好きな男が出来た…それなら「別れて暮らしましょう」「じゃなくて「別れましょう」と言うんじゃないか。

そんなことを考えてるうちにやかんのピーって音が鳴る気配がして（この音がキライで、僕は鳴る前に止めるようにしている）、僕は火を止め、コーヒーマーカーにお湯を注いだ。

「何で？」

注ぎながら僕は彼女に言った。彼女は黙ったままこっちを見つめ

ていた。彼女の癖だった。自分の言葉にすごく気を使うから「何で？」とか「どうして？」って質問にはすぐに答えられない。

ぼたっぽたっとしてコーヒーが落ちる音が、やけに大きく響いているように感じた。

「他に好きな男が出来たのか？」

しやうがなく思いついた中で一番ありそうなことを言ってみた。

「そんなわけないじゃない。そんなことしか思いつかなかったの？」

その言い方には僕も苛つとしたが、顔に出ないように気をつけた。僕が感情的になってしまうと彼女は「もういい」と言って何時間も黙ってしまう。

「そういう訳じゃないけど、真咲が黙るから…」

「だからって、好きな人が出来たら別れてって言わよ。」

「じゃあ何だよ。お互い上手くいってると思ってたけど。」

「違うわいよ。私だって今の暮らしが気に入ってる。」

「だから。じゃあ何で別れて暮らしたいんだ？」

彼女はまた黙ってしまった。僕はカウンターの横にある食器棚から深緑色のコーヒークップを二個取り出し、コーヒーを注いで彼女に渡した。彼女はそれを受けとるとようやく口を開いた。

「…母がね。…亡くなっ  
たらいいの。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5480d/>

---

まだ蒼い芽の中に君はいた

2011年1月16日01時05分発行